

第十二回 齋藤茂吉短歌文学賞

伊藤博 『萬葉集釋注』

集英社

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 馬場あき子

委員 岡野弘彦

佐佐木幸綱

高橋睦郎

本林勝夫

(五十音順)

伊藤博『萬葉集釋注』

(抜粋)

雑歌

泊瀬の朝倉の宮に天の下知らしめす天皇の代 大泊瀬雅武天皇

天皇の御製歌

一 籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そ
らみつ 大和の国は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて 我れこそ居れ 我れこそば 告
らめ 家をも名をも

雑歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 紀彦太 大泊瀬雅武天皇

天皇御製歌

一 籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳尔 菜採須兒 家告閑 (考吉) 名告沙根 虚見津
山跡乃國者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手 (志告) 吾己曾座 我許背齒 (元・應許者) 告目 家呼毛名雄母

『万葉集』開卷冒頭の歌。作者は第二十一代雄略天皇。いついかなる場合でも、最初に位置するものには、それなりの意味のあるのが、世の習い。この雄略御製も、『万葉集』二十巻に対して何らかの意味を負わされて、この位置を占めているのであろう。

標題に、『泊瀬の朝倉の宮に云々』とある「泊瀬」は、当時隠り処とされ、とくに「泊瀬小国」とも呼ばれた。また、「朝倉の宮」は、奈良県桜井市朝倉の地にあった雄略天皇の皇居。古くから今の黒崎付近がその跡とされてきたが、昭和五十九年（一九八四）六月、桜井市による諸宮調査会によって、桜井市脇本小字燈明田の地に、南北に三列に並ぶ十三の柱穴が発掘され、この地がにわかには有力視されるに至った。脇本燈明田は、泊瀬の谷の入口、三輪山南麓、初瀬川北岸の地。

さて、歌は、一読のもと、次のような情景を、人びとに想像させるであろう。

雄略天皇の支配する泊瀬小国のさる岡で、明るい春の日ざしをあびながら、入り乱れて若菜を摘む娘さんたちの中に、とりわけ気品の高い女性がいた。

身におびる籠や掘串の格別なさわやかさは、どこから見ても、彼女が今日の野遊びのあるじで、一族を代表して神を祭る尊い女にちがいないことを示していた。ちょうどそこを通りかかったのか、それともみずからも人をひきいて国見にやってきたのか、雄略天皇は、いちはやくこの娘さんに目をとめて呼びかけた。「籠もよ み籠持ち……」。

これから万葉四千五百余首の歌々を読み進めてゆけば、おのずから明らかになることであるけれども、『万葉集』の名義は、諸説ある中で、おそらく、

『万代集』（万世ののちまでも伝わる歌集）の意と見るのが（『万葉代匠記』）最も穏当だと思われる。その名義を象徴するかのように、『万葉集』は、うららかな春の日の、この呼びかけ歌によって幕をあける。

一首は、
おお、籠、立派な籠を持って、お
お、掘串、立派な掘串を持って、
ここわたしの岡で菜を摘んでおい
での娘さん、家をおっしゃい、名
前をおっしゃいな。

● 選考委員による選評

学問の域を超えた恩恵

馬場あき子

『萬葉集釋注』によって、現代から読む『万葉集』の基本的な視座が確立された。「五十五歳に始まり七十二歳に及ぶ」(巻十「あとがき」とかきつけられた詠嘆のこと)には著者の最も大切な人生の時期を全力投入された思いがこもっている。

本書の学問的価値はもちろんだが、齋藤茂吉短歌文学賞という、より文学的視野からも、『万葉集』の歌とともに生きていた人々への歴史的・文学的接近の姿勢がありがたい。古代の真摯な心とともに、開かれた奔放なことは遊びの豊かさをも見せてくれる。現代短歌はこうした古代の歌の水脈を引き込みつつ場を広げてゆくはずである。『萬葉集釋注』がこうした契機となるであろうことを疑わない。

新鮮な万葉展望

岡野弘彦

伊藤博氏の『萬葉集釋注』(全十一冊)は、氏の恩師澤瀉久孝博士の『萬葉集注釋』以来ほぼ四十年ぶりに、万葉集全二十巻のすべてに釋注をほどこした偉業である。殊に各巻の成立と、歌群ごとの構造に関する考察は、氏の多年の研究成果の集成で、万葉集の世界を一層新鮮に、魅力ゆたかに解き明かしている。

研究者や歌人は言うまでもなく、広く万葉集を愛する者にとつて必読の書であり、齋藤茂吉短歌文学賞にもつともふさわしい好著である。

新しい万葉集の読み

佐佐木幸綱

『萬葉集釋注』を読んでゆくと、万葉集の編者がごく近い人のように思われてくる。編者であるその人が、その長歌や短歌をどう読み、どういう意図でそこに配列したのか。そのあたりの呼吸、気合いのようなものが的確に読み込まれている。

万葉集を単なるアンソロジーと見るのではなく、パースペクティブな視野に立って構築された構造体と見ると伊藤博氏の独自の方法は、編者を身近な人とすることで確実に新しい万葉集の読みを開拓した。

この『萬葉集釋注』を、もし齋藤茂吉に読んでもらうことが可能ならば、かならず『新・万葉秀歌』が書かれることになるだろう。

詩歌を富ませるもの

高橋睦郎

賞は何に対して与えられるのか。直接的には対象となる仕事がいかに卓れているかに対して与えられるのだろうが、間接的にはその仕事がいかにのちの他の仕事に影響を与え富ませるかに対して与えられる、そして、後者の方がいっそう重要な意味を持つ、と言っているのではないか。卓れた詩歌がのちの他の詩歌に影響を与え富ませることは勿論だが、先の詩歌の卓れた研究がのちの他の詩歌に影響を与え富ませることもおさおさこれに劣るまい。伊藤博さんの『萬葉集釋注』十一巻を覗きみて、この仕事がのちの他の詩歌を富ませることを疑う者はあるまい。今回の受賞は齋藤茂吉賞自体を富ませるものでもある。

生体としての万葉集

本林勝夫

万葉学は近来の隣接諸学の発展にともない格段の進展を見せてきたが、同時に専門領域の緻密化は一般にはなじみ難い一面を生じたきらいもないではない。その意味で伊藤氏の『萬葉集釋注』は、個人の全釈としては画期的なものと思う。

著者はあるがままの万葉の姿を尊重し、そのために従来の一首ごとの注釈スタイルをとらない。歌群ごとに積年の研究成果をその場で生かし、そのことで万葉本来の生きた姿、息づかいを再現しようとする。しかも叙述は平易かつ文学性豊かであり、開巻たちまち引き込まれて行く。私自身にとって万葉全釈書で、こうした読みを経験したことはかつてなかった。誤解をおそれずに言えばそこに学と藝のみごとな融合があ

り、専門領域はもちろん、学究の側から一般読者に向けて構築された架橋としての意義もまた大きい。それはまた平成万葉学を記念するものであり、二十一世紀万葉研究への贈り物でもあると思う。

あるインタビューによると、著者が万葉学を志すきっかけとなったのは茂吉の『万葉秀歌』だったと言う。感慨深いことばである。

第11回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

伊藤 博 (いとうはく)

筑波大学名誉教授。文学博士。万葉学会代表。

大正14年長野県生まれ (74歳)。

昭和27年京都大学文学部卒業。

主要著書／『万葉集相聞の世界』、『古代和歌史研究』全8巻、『万葉のいのち』、『万葉のあゆみ』、『万葉集』上下、『図説万葉集』、『萬葉集釋注』全13巻など。



受賞の言葉

伊藤 博

齋藤茂吉を知ったのは昭和十四年七月、長野県伊那中学(現伊那北高)の一年生の時。後に評論家となった臼井吉見先生から、茂吉の「あかかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」を教えられた。先生は日本の歌の絶唱の一つと評し、かくの如く生涯を歩めと激まされた。感動して下校、書店で今日知ったばかりの齋藤茂吉の書が発見した。『万葉秀歌』上下。以来、この書に酔い痴れる。

その後、東京高師(現筑波大学)に進み、「齋藤茂吉の枕詞」と題する卒業論文を書いた。時あたかも、あの臼井先生が「短歌への訣別の論を出した。短歌から訣別しなければ民族の知性変革は果し難いと。違う。短歌から訣別すれば日本文化は滅びる。「歌の」原郷『万葉集』を生涯かけて研究し、実証して見せると、京都大学澤瀉久孝教授の門に入った。

爾来五十年。澤瀉訓詁学を基盤に、齋藤茂吉・折口信夫等の感性に学びつつ、『萬葉集釋注』全十一冊を成した。はからずも、それが第十一回「齋藤茂吉短歌文学賞」を受けた。「浪に近くわが居りしかば山かはのひまなき音の縁をぞおもふ」(齋藤茂吉「白桃」昭和八年)。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『斎藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不織書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
第九回 吉田 漱 『白き山』全注釈』 短歌新聞社
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

千九九〇―八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内
TEL・〇二三一六三〇―三三〇六